
瀬川泉！アメリカ家族旅行編!!

dandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瀬川泉！アメリカ家族旅行編！！

【Nコード】

N6433I

【作者名】

dandy

【あらすじ】

別連載「ハヤテのごとく！！！！super-combats
tory」の197話以降のアナザーストーリーです。ヒナギクの時と同様にオリキャラが出ますのでご了承下さい。

ほえ？（前書き）

アナザーストーリー第2弾です！今回の主役はいいんちよさんレツドこと瀬川泉！…また懲りずにオリキャラ復活です。大丈夫なんだろうか…。不安しかありません。ヒナギクイギリス留学んときは迷いがありました、今回は確固たる信念を持つて……でき……ない……と思います。まあ、とりあえず本編のオマケみたいな感じですから、気楽にやります。では、はじめます。

ほえ？

10月中旬―。ある日の土曜日、白皇学院に通う生徒二人がその父親と共に羽田空港に来ていた。3人は一般客とは別の場所から空港に入った。どうやらよほどの人物のようだ。

「泉〴〵。これがこれから乗る飛行機だぞ〴〵」

「わ、わかつてるよ。そんなこと」

―瀬川泉。白皇学院2年。通称、生徒会三人娘の1人だ。どうやらこれから父親や兄、兼執事の虎鉄とアメリカに行くようだ。

「どうした？せつかくお父さんとアメリカに旅行に行けるんだぞ？」

「だって…海外は飽きちゃったんだもん…」

「…すまん、泉。なかなか休みがとれなくてなあ。ソ。ー主催のイベントがあるからついでに一緒に旅行でもしてお前を喜ばせようとしたんだが…」

父、ストリンガーは多忙のため、あまり家にいないので泉が寂しい思いをしていないか気を遣い、この度、会社の仕事でアメリカにくついでに泉と一緒に過ごそうと考えたのだ。単に自分が娘といい、というだけかもしれないが。

「で、でも…お父さん忙しそうだし、たまには一緒にいてあげるよ

」

「い、泉い！」

ストリンガーは感激して目が潤んでいる。まわりからはクスクスと

笑い声が。

「ちょ、ちよつとお父さん！こんなところでなにしてるの！？は、恥ずかしいよおー！」

「お、おお。すまん。じゃあ泉。行くか」

「う、うん」

二人は飛行機の中のVIPルームへと案内された。ここでようやく今まで黙っていた虎鉄が口を開いた。

「あの…なんで俺だけエコノミーなんだよ」

「なんでだと？泉のついでに連れてきてやったんだ。エコノミーで十分だろ。泉」

「……………」

（親バカ…というか俺もあなたの息子なんですが…）

結局虎鉄は1人エコノミークラスに通された。いよいよ飛行機がニューヨークに向けて出発する。

―そしてハイジャックにも乱気流にも遭わずに飛行機はニューヨークに到着。泉は疲れきった様子で飛行機から降りた。

「泉！ニューヨークだぞニューヨーク！」

「うん。知ってるよ」

ストリンガーは元気だが。泉は機内でストリンガーの一方的な話を聞いていたためまったく寝ていないのだ。

「それで親父。これからどうするんだ？」

別の場所から出てきた虎鉄も合流。ちなみにもう夜なのだ。

「とりあえずパーティーは明日だから、別荘に行くぞ」

「え？お父さん。イベントってパーティーのことなの？」

「そうだとも。アメリカの企業のほとんどを集めての大規模なパーティーをやる。ついでに社の製品のお披露目もだ」

「そっちがついでなんだ…」

「さ、泉。もう疲れただろうから、早いとこ別荘に行くか」

「うん」

「おい！待てよ！」

半ば虎鉄を置いてきぼりに二人はあらかじめ用意されていたハイヤーに乗り込んだ。別荘に着くと泉はすぐに爆睡。時差ボケもあつてか昼までまったく目を覚まさなかったらしい。

続く

ほえ？（後書き）

…移動だけで終わってしまいました。瀬川ファミリー主体です。次回からたぶんオリキャラ出せると思います。…怖いです。次

ふえ！？（前書き）

…というわけでいよいよクライマックスです！もう…。構想は固ま
ってますがオリキャラがまったく固まってません。強風で吹き飛ば
されますから。スライムみたいにほつといたら力チ力チにはなりま
せんから。なににせよ、奇跡のオリキャラ第2弾はじまります。

ふえ！？

瀬川家一同がアメリカの別荘に着き、翌日のお昼。泉はようやく眠い目をこすりながら起床。ベッドの上で手足を目一杯のばした。

「ふへー……」

「ん？お嬢。起きたのか？」

泉が目を覚ますなり部屋に入ってきた虎鉄。ぼーっとしていたが泉は質問に答えた。

「うん。もう起きるよ」

「そうか。なら、今から昼御飯を作るから、ちょっと待つてろ」

「ありがとー」虎鉄くん」

虎鉄が部屋から出た後、しばらくして泉は寝巻を着替え、一階のリビングへと降りていった。リビングといってもかなり大きく、どこかい窓からは広大な庭が一望できる。辺り一面芝生で大型犬が何匹か放し飼いにされている。しかし泉は昔、犬に人形をスタボロにされた思い出があるためなかなか大型犬とは仲良くなれないのだ。

「お嬢。できたぞ」

「あ……うん。お父さんは？」

「親父なら朝早く起きて先に会場入りしたぞ。お偉いさん方がたくさん来るらしいからな」

泉は虎鉄の作ったスパゲッティを食べながら話を聞いた。

「でも……虎鉄くん。そんな場所に私たちが行っているのかなあ？」

「心配いらないだろう。適当にあいさつしておけば…」
「あいさつって…言われても…」

泉は不安になった。いくら白皇に通っているとはいえ英語はあまり話せない。コミュニケーションがとれるか心配なのだ。

「こ、虎鉄くん。通訳してよ！」

「え？ああ」

「良かった…」

そんなわけで夜になり、泉と虎鉄はニューヨーク市内にあるパーティー会場にやって来た。外観はまるでなにかの神殿を思わせるかのような壮大さで、噴水もあればライオン像が入り口の両脇に設置されている。ハイヤーで到着した二人は早速ソ。ー関係者に出迎えられた。

「 # * A - @ & a m p : * ~ ? 」

「うえっ？な、なに？」

泉に何か言ったのだが英語で早口なため何を言ったかわからない。
すかさず虎鉄が間に立ち、関係者と話をした。

「な、なんだって？虎鉄くん」

「とりあえず親父は中にいるから、親父のところについてくれたと」
「そ、そっか」

そのまま中に入り、パーティー会場へ。パーティーは盛大に行われており、人、人、人だらけ。みんなスーツ、もしくはドレス姿で大人ばかりだ。

「…やっぱり場違いじゃないのかなあ？」

泉は結局黒いパーカーで赤いスカートと、まさに普段着。ソ○ーの会長令嬢と知らなければ真っ先に追い出されそうだ。

「とりあえず親父のどこに行くか」

「あ…そだね」

うろつろとさ迷っているうちに虎鉄はストリンガーを発見。すでに何やらどこぞの企業のお偉いさんと話をしていた。

「親父」

「ん？おお。虎鉄か。…1人か？」

「1人なわけ…ってあれ？お嬢？」

虎鉄が振り返るとそこに泉はいなかった。どうやらはぐれたようだ。

「マ、マジかよ！お嬢ーっ！」

虎鉄は泉を探しにまたまた迷うことに。ストリンガーもそれなりに焦る。

「虎鉄ーっ！貴様、泉に何かあったら死刑だーっ！」

「なっ！？」

（…一応息子なんですが…）

「…ほえ？虎鉄…くん？」

はぐれた泉はバルコニーに着いていた。人だまりから逃れている内にたどり着いたのだ。

「うつつ…！迷子だよ…！どうしょ…」

回りを見ても知らない外人ばかり。泉は泣きそうになりながらバルコニーの柵に寄りかかる。

「虎鉄くんが来てくれるまで待とうつと…」

虎鉄が来るまで下を向いたまま待っていると、隣に泉より少し背の小さい男の子がやって来た。髪は赤く、色白だ。ピチピチの黒スーツを着ていて、泉の隣に来るなりネクタイをほどいた。

「…ったく。なんで俺がこんなパーティーに来なくちゃいけないんだよ」

泉はなにか言ったかはわからない。英語だから。しばらく泉が男の子を見ていると目があった。泉は焦り、知っている英語を瞬時に言った。

「あ…ナ、ナイストウミーチャー！」

「……………」

「…あれ？」

英語で言ってもなんの反応もない。それでも鋭い目付きで泉を見ている。

（な、なんでなにも言わないのよーっ！）

だんだん怖くなってきた泉だったが、ようやく男の子が口を開いた。

「…あんだ、英語できないだろ？」

「えっ!？」

泉は驚いた。英語ができないのを見破られたからではない。なんと日本語で答えたからだ。

「き、君、日本語できるの!？」

「…まずは名乗れよ。それが日本の礼儀だって…侍が言ってたぞ」

「待つて…！わ、私は瀬川泉…」

「ふーん…。初瀬川ね」

「は、初瀬川じゃないよ！瀬川だよ！」

「同じだろ」

「それより…君は？」

泉は赤面しながら切り返す。男の子はちょっと怒った口調で泉に詰め寄る。

「さっきから君、君って…！背が低いからって子供扱いだよ」

「そ、そうじゃないけど…。じゃあ…何歳なの？」

「…お前に教える義理はない」

「うっ…！」

「とりあえず人を見かけで判断するなよ。忘れるな！」

「ごめん…」

泉はしゅんとしてしまった。

「…なんだよ。そんな顔されたら俺が悪いやつみたいじゃなか！」

「だって…。そ、そんなことより名前は？」

「…ふう。俺はラルフ。…いずれソ。ーを…潰す男だ」

「ほえ？」

続く

ふえ！？（後書き）

ただただ一言。ソ。ーさん、ごめんなさい！

にははははっ」

泉はバルコニーで年齢不明（少なくとも泉は年下だと思っている）の少年、ラルフに出会った。

「…ソ、ソ。ーを潰すって…どういうこと？」

「そういうことだよ。初瀬川もここにいてるなら知ってるだろ？このパーティーはソ。ーの会長の変なヒゲのオッサン主催だよ」

「う、うん。まあ…」

（お父さん…すごい言われようだなあ…）

泉は困惑しながら話を聞く。

「いずれ…俺は親父の企業を継いで世界一の家電メーカーに押し上げるのが夢なんだ。…その足掛かりにまずはソ。ーを叩かなくちゃいけないよ」

「ふん…叩くって？」

「まずはソ。ーを上回るだけの資金をどうにかしなきゃならねえ。

国内で実績を上げた後、市場を中国に移すんだ！それで、ソ。ーの筆頭株主になって買収するんだ」

「す、すごいね…。意味がわからないよ…」

「だから話したんだ。お前、バカそうだから今の話、すぐ忘れるだろ？」

「ちょ！ひどいよっ！」

「うるさいな…。ピーピー言っな！」

ラルフはあきれた様子でネクタイを閉め直し、会場へと歩き出した。

「あ！どこいくの？」

「…今からソ。ーの会長の娘とこに行くんだよ」
「えっ？」

泉は自分のことだとすぐ気付いた。といってもラルフは泉がソ。ーの会長令嬢だとは知らないようだ。

「めんどくさいけど…なんかその女とコンタクトを取れって親父がうるさくてな…。興味もないやつと仲良くなかなれるかよ！」

「…会社のために頑張ってるんだね…」

「ん？ああ！のうのと暮らしてるソ。ーのやつらに一泡吹かしてやるんだよ。親父はダメだから、俺がやるしかないのさ」

「ほえ…」

「お前もそんな気の抜けた返事ばかりしてないで…ちょっとは自分の会社のために役にたつたらどうだ？いつまでもソ。ーのパーティーに行くだけってのも悔しいだろ？」

「え！？う、うん…」

（ど、どうしよう！？わ、私のお父さんがソ。ーの会長って言うタイミングが…）

泉はうーんと考えていた。するとラルフが泉の手をとった。

「え！？な、なに！？」

「今からソ。ーの娘っ子を探しに行くんだよ！」

「えっ！？わ、私はいいのに…」

「び、び、びびってんのか！？お前もソ。ーと親しくなればちょっとは会社の業績が上がるかもしれないんだぜ？ソ。ーを踏み台に俺たちがのしあがるんだ！」

「……うー」

もう泉はどうしようもなくなってしまった。言うに言えない状況だ。

「で、でもなんで私も一緒に行くの？」

「……う、うるせえな。こんな大人だらけの場所、1人じゃ行きづらいじゃんか！親父もSPもどこにいるかわからないし……。役に立たないけど……いないよりはマシだからな」

「……うんっ」

「……なんだそのうれしそうな顔は！まさか俺がガキだと思ってるんじゃない……」

「そんなことないよ」

……と泉は言うが完全に年下だと確信したようだ。

「それじゃーお姉さんがソ。ーの会長令嬢さんを一緒に探してあげるよ」

「あっ！やつぱり見下してるじゃねーか！待てよお！」

泉は自分より頼りなさそうなラルフと一緒にちよつと元気がでてきたようだ。見つかるはずのないソ。ー会長令嬢を探しに二人は再びパーティー会場へと入っていった。

続く

燃えないゴミで出しちゃったのだろ」

パーティー会場をうろろろする泉とラルフ。目的はソ。ー会長令嬢を見つけることだ。

「おい、お前」

ラルフは泉に声をかける。

「ちょ、ちよつと…。さつきからお前、お前つて…」

「ん？ああ。悪いな初瀬川。一ついいか？」

「…な、なに？」

（…ハヤ太君も名前を間違えられてこんな気持ちなのかなあ？）

泉はちよつとハヤテのことを考えた。といってもすぐ忘れたが。

「…初瀬川！聞いてんのか？」

「あ！ごめ〜ん、なに？」

「…ソ。ーの会長令嬢つてどんなやつだ？」

ラルフは真顔で泉に質問。

「え？知らないのに探してたの？」

「うるさあい！！俺は興味の無いものには一切食いつかない主義なんだよ！」

「あ…そうなの」

「初瀬川もどうせ知らないんだろ？くそっ…」

「なにも手がかりないの？」

「ん？…親父が言うには『とつてもかわいくてお前には一生縁のな

い子』だと」

「ふえ！！？」

泉の顔は一気に赤くなる。ラルフはあきれているが。

「なーにかわいくて一生縁のない子だよ…。相手が大企業だからって気を遣いすぎ…。ってどうした？初瀬川」

「い、いやゝ別に…」

「変なやつだな…。とりあえず片っ端からそれなりの女の子を探すしか…」

ラルフが歩き出そうとすると前から背の高い白スーツを着た黒髪の女性がやって来た。

「ラルフ様。一体どこにいったんですか？探しましたよ」

「ああ。悪いな」

ラルフは親しげにその女性と話をしている。泉は誰だか気になった。

「あのゝ…ラルフ君？誰？」

「ん？俺の執事」

「え？女の執事さんなの？」

「ああ」

「ほえゝ…。は、はじめまして…って日本語じゃ通じないよね？」

泉が苦笑いしていると女執事はヒザをつき、泉にあいさつ。

「はじめまして。私はペイリーと申します」

「わっ！？日本語しゃべれるんですか？」

「はい。瀬川泉様」

「え？どうして私の名前を？」

「…執事ですから、このパーティーに来ている方のお名前などはすべて把握しております。…ところでラルフ様？」

「なんだよ？」

「一体なぜ泉様とご一緒なのですか？」

「いろいろあるんだよ。初瀬川、行くぞ」

さっさと行きたいラルフをペイリーが止める。

「ラルフ様。一体どちらに？」

「今からソ。ーの会長令嬢を探すんだ。ちょうどいいや。お前も手伝え」

この言葉を聞いたペイリーはポカンとした。ラルフはちょっと苛立った。

「んだよ。その目は」

「…ラルフ様。会長令嬢様なら目の前にいらっしやいますよ…」
「…へっ？」

目の前にいるのは泉だ。

「は、初瀬川？お前…」

「にはは…。ごめ〜ん、私がソ。ー会長令嬢なんだ…」
「…なっ！」

ラルフは一瞬驚いた。だが、もう頭の中の整理はついた。

「早く言えよ！なーんだ。探す手間が省けたぜ！」

ゴッソ！

ラルフはペイリーに叩かれた。

「いてっ！？な、なにすんだよぉ！」

「口を慎んでください。相手はソ。ーの会長令嬢なんですよ」
「ぐう！」

「…日頃から目上の方には敬意を示すよう教えたはずですが？」
「目上じゃない！今に追い付いて…」

ゴッソ！

もう一発。

「…痛い…。ごめんなさい…」

「わかればいいんですよ。わかれば」

「あ、あの…。私、別に気にしてないから大丈夫ですよ…」

「おっと…。これは失礼。さ、ラルフ様。行きますよ」

ペイリーはラルフを連れていこうとしたが、泉がラルフの手をとった。

「あの…。もうちょっとお話したいんですけど、いいですか？」

「…泉様が言うなら。ラルフ様。失礼のないようにしてくださいね」
「…うん…ひくっ…」

頭を打たれたことで涙目になるラルフ。そんなラルフを連れて泉はまたバルコニーに向かうのだった。

続く

潰されたくないよぉ？

―泉がアメリカに来てから2日目。泉は朝から別荘の外でソワソワしていた。

「遅いな？まだかな？」

するとしばらくしてリムジンがやって来た。中から出てきたのはパティーで知り合ったラルフとその執事ペイリーだ。

「よ、よお泉！」

「泉『さん』ですよ、ラルフ様」

「…別にいいだろ？」

ラルフが降りてくると泉が近づいた。

「おはよう」

「おはよう…。ちゃんと約束は果たしにきたぜ」

「待ってたよ」

「じゃあ行くぞ。早くしないと試合が始まっちゃうぜ」

「うん」

泉は早速リムジンに乗り込んだ。その様子を別荘から父・ストリンガーが食い入るように見ていた。

「い、泉！せっかくアメリカに来たのに…お父さんを見捨てないでくれー!!」

おいおい泣く父を虎鉄はあきれた表情で見ていた。

(…いい歳してなにを…)

―泉がストリンガーをほったらかしてラルフと出掛けたのは2日前のパーティーで約束をしたからだ。二人はバルコニーで話をしていた。

「ぐす…なんだよ。俺になにかあるのか？」

「えつと…とりあえずごめんね。紛らわしい思いをさせちゃって…」

「別に…さっきも言っただろ？見つかってよかったって…。あ！そうだ！さっきまでのことは忘れてくれ！興味がないとか…めんどくさいとか言って…」

「べ、別に気にしてないよお…」

「…それで…だな。親父との約束もあるし…。お前、これからどうするんだ？」

「これから？」

「旅行に来たんだろ？明日からどうするんだってことだよ」

「別に予定は…」

と泉は言うが、ストリンガーが密に計画していることは知られてい

ない。

「なら、明後日、ちょっと一緒にでかけないか？せっかく知り合えたんだ」

（ソ。ーの会長令嬢と親しくならないわけにはいかない！これは千載一遇のチャンスだ！）

ラルフは真剣な眼差しで泉を見る。泉も自分より年下の男の子の頼みなら無下には断れなかった。

「いいよ」私も…最近アメリカに来てなかったし、案内してよ」
（たまには…男の子と遊ぶのも悪くないかな…）

というわけで泉はラルフと一緒に遊ぶことに。ストリンガーとその後、もめたのは言うまでもない。

―昼。リムジンはニューヨーク市内の野球場に来ていた。ペイリーが先に降り、ラルフと泉は降りた。

「ほえっ！野球場？」

「そうさ。野球さ。…もしかして興味ないのか？」

「そ、そういうわけじゃないけど…」

「さ、お二人とも。バックネット裏に席をとってありますので…」

ペイリーの案内で球場内へ。

「ふえー！大きいね…」

「だろ？これからここで試合があるんだ！楽しみだな」

「野球好きなの？」

「ああ！まあ…俺が家の家電メーカー継いでなけりやメジャーリーガーになつてるとこだな」

「へー…」

とりあえず泉は生返事。

「ラルフ様。なにかありましたらお呼びください。外で待機しておりますから…」

「おお！わかったぜ」

ペイリーはその場から去り、泉とラルフは二人に。その二人を遠くから見ている黒服の二人組がいたのだが…。

続く

やだよぉー！早く帰りたいよぉー！

―二人が野球場に来てから2時間後。試合が始まった。だが、その時にはすでに泉はぐっすり眠っていた。

「スー…スー…」

「……………」

（なんだよ…やっぱり女をつれてくるんじゃないぜ…。まあ…無理に見せることもないか）

ラルフは試合に集中。泉をそのまま寝かせておくことに。1回が終わるとラルフは席を立った。

（さて…便所、便所…）

ラルフがいなくなり泉は1人に。すると泉の元に黒服の二人が近寄る。

（相棒…コイツ、確かソ。ーの会長令嬢だよな）

（ああ…。写真にあったとおりだ…）

（連れの男は何者かは知らねーが…まあいいだろう）

男の1人が泉を背負う。回りからは不思議な目で見られたが、怖そうなので誰も声をかけられなかった。

「…あれ？泉…？」

ラルフが帰ってきたが泉がいないことに気付いた。便所ついでに買ってきたハンバーガーを席に置き、隣にいた男性に声をかけた。

「なあ。ここに女の子がいたろ？知らないか？」

「さっきの女の子？…なんか知らんが黒服の男に抱き抱えていかれたが？」

「はっ！？なんで止めねーんだよ！？」

「しるかボケ！止める義理なんかないわ！！」

「ちっ…！」

ラルフは苦い顔をし、携帯電話を取り出した。相手はもちろん執事のペイリーだ。

『はい。なんですか？ラルフ様』

「た、大変だ！泉がどこかにさらわれちゃった！やばいぜ…！もし殺されでもしたら…！」

『落ち着いてください。…さらわれたということは身代金目的である可能性が高いですから…無下に扱われたりはしないでしょ。お任せください』

「た、頼む！」

携帯電話を切るとラルフは真っ先に球場外に向かって走り出す。人

混みを押し退け、ペイリーと合流するつもりだ。ペイリーはというとランシーバーを出し、SPたちに連絡。

「こちらペイリー。SP0025。瀬川泉さまが何者かに誘拐された様子。A隊は速やかに全ゲートを監視。B隊は球場内を搜索。C隊は球場回りに逃走用の車がないか捜査。特殊部隊は人質救出の準備を」

『了解』

一気に指令が伝わり、今まで私服で紛れていたSP部隊計100人は行動を開始。その頃誘拐犯は球場内で外の様子をうかがっていた。

「まずいぜ相棒…！」

「心配するな。今こそこいつで脱出だ」

男がポケットから出したのは脱出に使うために用意した偽の関係者証明書だ。

「こいつで関係者専用口から逃げれば問題は…」

「そうはいくかよ！」

「!?!」

二人が振り返るとそこにはラルフが。

「貴様…！」

「泉！無事か！」

男の一人は大きいバッグを持っていた。ラルフはバッグの中に泉がいることを確信。

「てめ…！そんな中にも泉が…！？」
「ふん！知るかよ！」

ズキューーン！！

「…ぐわああっ！！」

男は突如発砲。銃弾は右足を直撃した。

「ち…ちくしょ…！！待て！っ…！」
「残念だったな！」

ボワン！

突如白い煙がまかれ、辺りは真っ白に。

「ケホッ…！い、泉！」

白い煙は球場の外まで広がり、辺りはパニックに。試合どころではない。SP部隊も完全に視界を遮られてしまった。

「な、なんだ！？」
「み、見えない！」

ペイリーのいる場所にも煙幕が及ぶ。

「ち…！ふざけたマネを…！だが…！」

五感を頼りに辺りを見渡す。そして微かに見えた。球場から走って逃げる二人組を。

「奴等か！」

ペイリーは勢いよく走り出す。そして男の一人に蹴りを食らわした。

「ぐわっ！」

「どうした相棒！？？」

気付いたときにはもう一人もパンチを食らい、ダウン。

「はぁ…はぁ…！これが…」

ペイリーがバッグを開けるとそこにはガムテープで口をふさがれた泉がもがいていた。

「泉さま！」

「……ぷはっ！うつつ…恐かったよぉ…！！」

「もう大丈夫ですよ…」

泉はペイリーに泣きついた。恐怖から抜け出し、ようやく一安心。

「そ、そうだ！ラルフ君は！？？」

「…おそらく中に」

泉が中に行った時にはラルフはいない。ラルフは撃たれた足の治療のため、すぐに病院に運ばれたのだった。

続く

たそがれよりも暗きもの――世界は私のためにある――！！

――事件の翌日。ここはN Y市内の病院だ。泉は撃たれたラルフの見舞いにきていた。

「だ、大丈夫……？」

「弾は摘出したよ。幸い骨には異常はなかったからな……」

「ご、ごめん……私のせいで……」

「お前のせいじゃねーよ。悪いのは犯人なんだから。あんまり落ち込むなよ」

「うん……」

落ち込むなど言われてもベッドで寝ているラルフを見ると胸が痛む。足には包帯が巻かれている。

「……わ、私になにかできることある？なんでも手伝うよ！」

「……敵会社の令嬢に看護してもらうなんてムリだね」

「敵って……！」

「いいんだよ。ケガのことなら病院のやつらに任せれば」

「うん……」

別に泉に用はない素振りを見せる。だが、ちょっと考え、口を開いた。

「……けど、なにか手伝いたいなら、一つだけ頼みがあるんだが……」
「なに？」

「明日、野球の試合があるんだ」

「や、野球……？」

「……友達でやってる草野球みたいなもんだ。けど……このケガじゃ俺

は行けないから、代わりに試合に出てくれないか？人数、ギリギリなんだ」

「えっ！？でも私、野球なんか…」

「なんでも手伝うって…言っただろ？やる前からできないって決めつけるなよ」

「…えーと…」

「…ダメか？」

「うーん…」

（野球なんか…やったことないけど…私になにかできることがあるのなら…）

泉は一息入れ、答えた。

「わかったよ！私、やってみるよ」

「本当か！？そりゃ良かった！…だったら…ほら」

「ほえ？これは…？」

ラルフが泉に渡したのは一冊の本だ。

「退屈凌ぎに持ってきてもらったんだ。野球の本」

「…英語で読めないよ」

「…ちよつとくらいわかるだろ！」

「まあ…ちよつとは…」

（こんなことなら普段から真面目に授業受けとくんだったなあ…）

泉は本をパラパラとめくる。だが、内容はちんぷんかんぷんだ。

「…完全に初心者なのか？」

「う、うん…」

「はあ…。なら、泉にはライトをやるように仲間に伝えとくから」

「ライト？」

「ライトくらいわかるよな？」

「う、うん！バッチリ！」

…とウソをついておく。

「よし！頼んだぞ！おい、ペイリー！」

「はい」

ラルフが呼ぶと部屋に執事のペイリーが入ってきた。

「泉にあれを」

「はい。用意はできています」

「…こ、これは？」

「バットとグローブ、そしてボールです」

「明日までちょっとくらい練習すれば…まあ…やらないよりかはマシになるんじゃないか？」

「泉様。明日、昼頃にお迎えに上がりますね」

「は、はい…。じゃ、じゃあね、ラルフ君」

「おう！」

―病院を後にし、泉は別荘に帰ってきた。家に入るや否や父・ストリンガーがやって来た。

「い、泉！どこに行っていたんだ！外には行くなと言ったじゃないか――！」

「へ、平気だよ！車で行ったんだし……」

「……もしやまたあの小僧のところに……ってなんだその野球道具は！？」

「えっ……と……明日、ちよつと野球の試合に……」

「ダメだ――っ！――そんなもの、お父さんは許さん！明日、すぐに日本に帰る――！」

「え！？な、なんでよ！」

「なんで！？誘拐されそうになったんだぞ！？お父さんは心配で心配で……！」

「それは……だ、だけど……」

「泉の身の安全を考えてのことだ！」

「……うん。け、けど、帰るのは明日の夕方にしてよ！約束したの……代わりに試合に出るって……」

「泉……確かに撃たれた小僧はかわいそうだが、何も泉が責任を感じることはない」

「……責任は感じてないよ。けど……ここで行かなきゃ……私、もうあの子と二度と会えないような気がするんだ……」

泉はいつも以上に真剣な眼差しでストリンガーを見た。娘の決意にストリンガーもようやく折れた。

「……わかった。だが、夕方までだぞ！いいな！」
「う、うん！」

試合に出る許可をもらい、泉はすぐに屋敷の中を歩き始めた。

「おーい！虎鉄くーん！」

「…なんだ？お嬢」

虎鉄はさっきまでストリンガーの説教を受けていたようで疲れた顔つきに。事件の日は泉のボディーガードをすっぽかしていたからだ。

「虎鉄君はさ…野球わかる？」

「野球？…ちよつとはわかるが…」

「だっ、だったらちよつと付き合ってくれる？」

「…へ？野球を…？」

「う、うん！明日までにちよつとはうまくならないと…」

「…役に立つかはわからないぞ」

「そ、それでもやりたいんだ…」

「わかった」

そんなわけで泉は虎鉄と一緒に野球の特訓をすることに。屋敷の庭で練習をはじめた。

「よし。泉、いくぞ」

「う、うん！」

グローブをはめた泉に虎鉄はボールを投げた。虎鉄はゆっくり投げたつもりだったが、泉のグローブには収まらず、後ろに転がっていた。

「あ…あれっ？おかしいなあ…」

「お嬢ーっ。投げてくれーっ」

「う、うん！とりゃあ！」

泉の投げたボールは思いっきり下に叩きつけられ、コロコロ転がり虎鉄の足元に到達。

「…お嬢。とりあえずまずはバッティングからやってみるか？」
「そ、そうだね」

泉はバットを持ち、構える。今度も虎鉄は緩いボールを投げた…のだが。

「へやっ！」

スカッ

「とりゃ！」

スカッ

まったく当たらない。

「お嬢…。全然違うとこ振ってるぞ」

「ま、まだ始めたばかりだから…。も、もう一回！」

その後ひたすら泉は振り続けた。結局まともな当たりは0だった。だが、必死に練習する姿を別荘からストリンガーはずっと見続けていた。

続く

また学校でね」

―試合当日。泉と虎鉄は玄関にいた。バットやグローブなどは虎鉄が持ち、泉は手ぶらだ。野球の試合なのだが、仲間内でやるため、服は普段着だ。

「じゃあ親父。行ってくるな」

「ああ。だが、くれぐれも忘れるな！夕方の飛行機で日本に帰るんだ。迎えに行ったらすぐ来るんだぞ」

「わかったよ、お父さん」

二人はストリンガーに見送られ屋敷の外に出た。そこには既にペイリーがリムジンを用意して待っていたのだ。

「お待ちしておりました」

「…たかだか草野球のためにリムジンを使うのかよ」

「防弾ガラスです。なんの心配はありませんよ、虎鉄さん」

「そりゃあよかった…」

防弾ガラス仕様のリムジンなど初見なので虎鉄はちょっと驚いた。

「まあ…物騒な世の中、これくらいは当然。なにもこの前の事件でこうしたのではないですから。ささ、どうぞ中へ」

「う、うん」

二人はリムジンに乗り込んだ。運転するのはペイリーだ。

「ここから30分ほどの郊外に野球場…というか公園があります。試合はそこでやります」

「あの、他にはどんな人が来るんですか？」

「…まあ基本はラルフ様の通う学校のご友人がチームメイトです。皆、泉様より年下ですよ」

「へ…」

「なにかあれば私に申し付けてください。手を貸しますよ」

「あ…ありがとうございます」

そしてリムジンは公園に到着。公園はかなり広く、ベンチで仕事をする者、ペットの犬とフリスビーで遊ぶ者などたくさんいる。その一角で野球用具を持った集団を発見した。

「も、もしかしてあの人たち？」

「はい。そうですよ」

泉たち3人が歩いていくと向こうの集団も泉たちに気付いた。

「あ！おい！ペイリーさん！」

何人かの男の子がやって来た。年下と聞いていたが皆、泉より背が高いか同じくらいだ。

「おはようございます、みなさん」

「なあ。ラルフが撃たれたのってホントなのか？」

「ええ…。しばらくは松葉杖が必要みたいです。治らないケガでは
ありませんよ」

「よかった…。で、そっちの女がラルフの代わり？」

「はい。瀬川泉様です」

泉は英語でよくわからなかったが自分の名前が会話に出てきたことはわかった。すると集団の中から一人、泉と同じ女の子が泉に近づいた。

「よろしく、泉。女の子で野球なんて珍しいけど気にせずやりましょう！」

「……オ、オッケー！」

とりあえず英語で返答。

「じゃあ泉も来たから、試合、始めるわよ！」

どうやら試合はクラス内でチームを二分して行われるようだ。泉を入れて18人。ギリギリだ。

（…だ、大丈夫かなあ…）

心配そうになる泉。それを見てさっきの女の子が声をかけた。

「大丈夫？緊張してるの？」

「あ…えっと…」

英語がわからない泉。すぐにペイリーが通訳。ようやく泉は理解した。

「だ、大丈夫！それよりお名前は？」

「私？私はマリー。よろしくね」

「う、うん！よろしく」

泉は年下とは言え、同じ女の子がいてちょっと安心。チーム分けも終わり、いよいよ試合だ。泉はまずはライトの守備についた。マウンドではマリーが投球練習をしている。

（…あの子、ピッチャーなんだ。すごいな）

泉は昨日、ルールブックを読んで一応ルールは一通り覚えたようだ。主審は毎回、攻撃チームの一人が務める。主審の手が上がり、試合開始だ。

「てりゃあ！」

ズバーン！

「とりゃあ！」

ズバーン！

マリーの投げるボールは速く、連続三振。男子顔負けの実力だ。

（ほえ。私の投げたボールとは大違いだなあ…）

カーン！

ようやく前に飛んだ。打球は高々と上がり、ライトへ。

「泉！いつたわよ！」

「え！？あつ！」

マリーの声に泉は反応。ボールは見えたが落下点がわからない。とりあえず前進した。だが、ボールははるか後ろにポトンと落ちた。動かなければ取れたボールだ。

「ええ！？そんなあ！？」

泉は急いでボールを追いかける。そしてボールを取ると大遠投。

「とりゃあああ！」

泉渾身の送球はセンターに飛んでいった。ランニングホームランだ。

「……あ……」

喜ぶ相手チームを見て、泉はがっかり。なんとかこの回は1点で終わった。ベンチに戻る泉はしゅんとしていたが、マリーたちは泉に励ましの声をかけた。

「泉！惜しかったね！次は必ず取れるわよ！」

「そうだよ！野球にミスは付き物さ」

「初めてなんだから気にするなよ！」

ペイリーの通訳を聞き、泉は涙を拭った。

「あ…ありがとう…みんな…！」

攻撃はすぐ終わり、再び泉は守備に。

カキーン！

痛烈なゴロが1、2塁間を抜ける。鋭い打球は泉の元へ。

（き、来ちゃった！お、落ち着いて…）
「…あ！」

打球は泉の股の下を抜けた。必死に追いかけるもまたまたランニングホームランに。

（うつ…！全然役に立たないよお…！）

このランニングホームランを皮切りにこの回、3点追加し、4対0に。長い守備も終わり、泉はベンチに戻る。すぐにマリーが駆け寄る。

「泉！元気ないわよ？どうしたの？」

「だって…またみんなに迷惑を…」

「…遊びなんだから、楽しんでやらなきゃ損よ？私だってたくさん打たれたんだから！」

「そうだよ、泉！」

まわりも泉を励ます。泉はまたまた泣きそうに。

「うん…。が、頑張るよ…！」

そしてこの回、連打でようやくチャンスができた。1点返し、なおも2死2、3塁で8番の泉に打席が回ってきた。

「泉！頑張つて！」

「マリちゃん…。う、うん！」

泉は慣れないヘルメットをかぶり、打席に入る。気合いは十分だ。
…が。

ズバーン

ズバーン

ズバーン

「ストライク、バッターアウト！」

虎鉄のボールが当たらなかった泉はあっさり三振。

「…やっぱりうまくいかないなあ…」

再び守備に。この回はマリーが連打を浴び、2死満塁のピンチだ。

「とりゃ！」

ピュッ！

カーン！

打球は高々と上がり、またまたライトへ。

「き、来た…！ど、どうしよう…！」

泉は2、3歩下がる。するとマリーの声が泉に届いた。

「泉！前よ！」

「え！？う、うん！」

すぐに前に走る。

「ストップ！」

「あっ…！」

パシッ！

止まった場所はまさに落地点。泉のグローブにはボールがしっかり収まっていた。

「や、やった…！取れた…！」

『泉ーっ！』

「み、みんな…！」

まだ試合途中だというのにサインはライトの泉の元へ。全員、泉を祝福。

「ありがとう泉！泉のお陰で助かったわ！」

「マリちゃん…！」

泉の目にはうっすら涙が。ただし今度は嬉し涙だ。

この後、試合はトントン拍子で進み、いよいよ最終回。泉のチームの攻撃だ。ちなみにスコアは8対5で負けている。

「あの…マリちゃん」

「なに？」

「ラルフ君は…野球、うまいの？」

「ラルフはうまいわよ。私と同じピッチャーだし。体は小さいけど、私より球も早くて打つしさ」

「そうなんだ…」

（そんな野球が好きなのに…私のせいで…）

ベンチでラルフのことを考える泉。すると後ろから肩を叩かれた。

「なんだなんだ。負けてるじゃんか」

「…え？ラルフ君！？なんで！？」

そこには松葉杖をついたラルフが。他のメンバーも驚いた。

「な…！ラルフ！？なんているのよ！？ケガは！？」

「心配するな。許可はもらってるよ。なんだ。マリー、8点も取ら

れたのかよ」

「あんたみたいにくまうかないのよ」

ラルフもベンチに座る。泉の隣だ。

「そっさいや…泉。もうすぐ帰るんだって？お前の執事から聞いたぜ」
「う、うん…」

「…悪かったな。結局、嫌な思い出しかなくてよ」

「そ、そんなことないよ！…今だって楽しいよ。アメリカに来て…
みんなと遊べたんだから♪」

そして打席のマリーが倒れた。泉に打順がまわってくる。2死満塁だ。

「泉！ホームランで逆転だぜ！思いっきり振ってこい！」
「…うんっ！」

過去4打席は全て三振の泉。ここで打てなければゲームセットだ。

「へりゃ！」

スカッ

「ふん！」

スカッ

あっさり追い込まれる。

（だ、ダメだよ…）

「泉！最後まで諦めるな！あと1球あるんだ！お前の練習の成果を見せてくれ！」

「頑張つて泉！」

「打て、お嬢！」

「泉様！」

「……みんな……」

泉の目付きが変わった。そしてラストボールが放たれた。

「当たれ……っ……！」

カー……ン！

「…じゃあ…私、日本に帰るよ」

「ああ。…短い間だったけど…ありがとな」

「こ、こつちこそ！なんか照れるよ…」

試合も終わり、夕方に。泉は父・ストリンガーの迎えで空港に行くところだ。

「でも…ごめん。足…」

「…もういいよ。それより、お前のお陰で踏ん切りがついたよ」

「えっ？」

「メジャーリーガーはもう諦めて、これからは打倒ソ。ーに全力を尽くすってな！足をケガしてても頭脳で勝負だ！」

「…応援してるよ」

「…なんでお前が応援するんだ？まあいいけど」

話をする二人の元に虎鉄がやって来た。

「おい、お嬢。親父が待つてるぞ」

「あ、うん。じゃあ…さよならだね」

「…あと、これやるよ」

ラルフはペイリーにボールをもらい、泉に渡した。なにやらペンで英語が書かれている。

「これは…？」

「記念のボールだよ。いらなきゃ捨ててもいいんだぜ」

「…す、捨てないよ。宝物にするね」

「…ぷっ！」

「な、なにがおかしいのよーっ！」

「べ、別に！ほら！早く行けよ！」

「…うん。ありがとう！ラルフ君！」

「あばよ、泉！」

二人は握手をし、それぞれ別れた。泉は右手にしっかりともらったボールを握っている。リムジンが走り去るとペイリーがラルフに質問をした。

「…ラルフ様。ボールに一体何を書いたんですか？」

「なんだ。読まなかったのか？」

「まあ…」

「教えてやるよ。あれは…」

ラルフの言葉を聞き、ペイリーは首を傾げた。

「…なぜそんなことを書いたんですか？」

「事實は事實だろ？あんな言葉が書いたボールを宝物？…英語が読めないって損だな。次会ったら思いっきり笑ってやる！」

「まったく…。さ、病院に行きますよ」

「…ああ」

―所変わってリムジンの中。泉は虎鉄にボールを見せていた。

「なんて書いてあるの？虎鉄君」

「えつと…『瀬川泉 試合終了の三塁ゴロ記念ボール』だと」

「…あ。最後の打球のことか…。でも、うれしいな」

泉にとっては内容どうこうというより異国でできた友達からプレゼントをもらえたことが一番良かったようだ。このボールは日本に帰った後、部屋のぬいぐるみと共に飾られることになったようである。

また学校でね♪（後書き）

総評：やっぱり最後がディグダグダです。当初の予定ではちゃんと1日1日書くつもりでしたが、次に繋がらない話ばかりつてのもあれかなと思い、泣く泣く8話…。本当は虎鉄の恋ばなとかやりたかったんですけど、後の祭り。オリキャラは…やっぱうまくいきませんね。最後は野球好きが顔を覗かせてしまいました。野球知らない人にはよくわからんラストになってしまいました。試合終了のサーライナーといえば…今年（2009）の夏の甲子園、中京大中京対日本文理を思い出します。ていうかそこからパクリました。あれが抜けていたら…。まあタラレバの話をしたらきりがないのでね。勝った中京大中京の選手が泣いて負けた日本文理の選手は笑顔だったのが印象的でした。まあ私の中の思い出の試合はやはり埼玉代表聖望学園の試合ですね。一回戦で負けちゃったけど、地区予選での熱い試合はすごかったです。…おしゃべりが過ぎましたね。一応完結できたので明日からは本編一本に集中できます。集中したからといって何かが変わるわけではないんですけどね…。では、最後までお付き合いいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6433i/>

瀬川泉！アメリカ家族旅行編!!

2010年10月10日19時23分発行